

麻島昭一著

戰間期住友財閥經營史

東京大学出版会

著者略歴

1931年 東京に生れる

1953年 東京大学経済学部卒業

現在 専修大学経営学部教授、経済学博士(東京大学)

主要著書

「日本信託業発展史」(1969年、有斐閣)

「日本信託業立法史の研究」(1980年、金融財政事情研究会)

現住所

東京都国立市東 2-14-36

戦間期住友財閥経営史

1983年10月30日 初版

[検印廃止]

著者 あきしま しょういち 麻島昭一◎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 江村 稔

113 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内

電話(811) 8814・振替東京6-59964

整版 三和印刷株式会社

印刷 三栄印刷株式会社

製本 牧製本印刷株式会社

ISBN 4-13-041013-X

41133

はしがき

本書は私の住友財閥史研究の第一冊目にあたるが、最近の住友財閥に関する研究書・啓蒙書の中では四番目になるようである。すなわち、宮本又次・作道洋太郎編著『住友の経営史的研究』（実教出版、昭和五四年）、作道編著『住友財閥史』（教育社新書、同五四年）、作道編『日本財閥経営史 住友財閥』（日本経済新聞社、同五七年）が先行している。この分野での私の研究は、まだ決して長いとはいえないが、それにもかかわらず拙速の批判を覚悟して本書刊行に踏切ったのは次のような背景による。

第一に、近年の目ざましい財閥史研究の中で、住友はつい最近まで未開拓の分野に属し、他財閥の研究成果（たとえば三井、三菱）に比較して業績がすくなく、財閥の総合的研究のために、住友はなるべく早く欠落を埋めるべき対象の一つといえよう。本書が諸財閥を対象としたものでなく、住友財閥に限定しても十分に意味があると考ええる。

第二に、私が興味を抱く大正・昭和前期の財閥研究は、諸財閥を通じて總体的に手薄であって、財閥の全体像を把握するには、独占段階における財閥の役割解明に早く着手する必要がある。本書が一九二〇年以降、すなわち住友合資会社成立以降に限定した研究であっても、それなりに意味があると考ええる。

第三に、本書が依拠した住友の内部資料（「序章」を参照）は非公開のため、それをみることでできた者としては、出来るだけ早く財閥研究に適用し、研究成果の形で発表することが、研究者としての社会的責任と考える。本書が拙速を承知のうえて公刊される所以である。

ところで本書の執筆を通じて改めて経営史のむずかしさを思い知らされた。経営史学に遅く参入した私が、浅学菲才の故もあって「むずかしさ」にたじろぐのは当然であるが、かならずしもそれだけの理由ではないように思われる。

たとえば現在の経営史学界における代表的見解の一つ——中川敬一郎教授の経営史方法論（たとえば、その著作『比較経営史序説』東京大学出版会、昭和五六年、をみよ）を念頭においても、総合財閥の一つ住友を具体的に分析・記述しようとするれば、「理屈はわかってもうどうまとめるか」はきわめて難問である。とくに総合財閥ともなれば、多角的に展開する事業・会社を数多く内包するだけに、時間的・場所的に拡がった考察分量の膨大さ、互いにかみ合う問題の複雑さ、多様さのゆえに論理的・体系的に財閥の全貌を論じつくすことは非常に困難な課題といえよう。その証拠に、最近刊行された『日本財閥経営史』シリーズの三井財閥、三菱財閥、住友財閥の三冊をみても、「財閥経営史」と銘を打ちつつ、それぞれ苦心の跡をにじませながら、問題意識、構成、分析方法を異にしている。要するに、模範とすべき実証分析にもとづく財閥経営史の決定版は、まだ生れていないように思われる。現段階がまだ試行錯誤的に財閥経営史のあり方を模索しているところならば、私なりに構成した本書のときものがあってもおかしくはあるまい。

本書は、序章でやや詳しく述べるように、分野を限定した住友財閥経営史である。時期的に大正一〇（一九二一）年の住友合資会社成立から戦時体制期までに限定したばかりでなく、課題の設定をしぼっている。当初の構想では、私なりの体系的分析が実現されるはずであったが、一冊の書物として許容される通常の紙幅には到底おさまり切れず、課題をしぼることを余儀なくされた。そこで住友財閥研究で欠落し、おそらく本書に期待されているのは、住友財閥に関するファクト・フラインディングであろうと判断し、内部資料に依拠した計数・事実の提示を優先することにした。本書第二部の個別分析がきわめて大きなスペースをとり、第三部の支配構造分析まで含めると、それだけで大冊になっているのは、右の趣旨にほかならない。そのため財閥経営史としては、当然含まれるべき若干の課題の解明を先へ延ばさざるをえなかった。

その一つは、住友財閥の経営組織、経営者、彼等の経営理念と経営戦略などである。後述のようにそれらにすでに着手した拙稿もあるが、本書では財閥の統括組織と統括方法に限定し、それ以外の諸論点を割愛した。したがって本書には、マネジメントを担った人々の役割の解明が意識的に省略されているが、そのことを軽視するものでは決して

ない。

その二つは、經濟過程との関連であつて、住友財閥の意思決定・行動に影響を与えたはずの諸条件、とりわけ個別分析で説明した傘下各社の同業者との対抗・協調関係、資金調達方法に関連するはずの金融環境、などの考察が十分なことである。多角的に展開した財閥企業が、それぞれの事業分野においていかなる地位を占め、独占的行動からいかに利益を生みだしていくか、という視点が必要なことはいうまでもない。

右の論点は一書に盛込むにはあまりに大きい問題であるため、途中から切り離す方針をとらざるをえなかった。したがつてその検討は本書に引續いて別書としておこなわれる予定である。

私のように実証研究を志す者にとつて、次のような主張があることもこの際付け加えておきたい。すなわち、歴史分析に種々の方法・立場が許容されるときにも、研究者にも種々のタイプがあるし、あつてもよいと思われる。資料の宝庫に最初から居る者は別であるが、必要な資料を発掘し、分析の素材を提供する者がいなければ、学問の前進もありえない。本書は住友財閥に関する分析素材を提供する点で最低限の役割を果すものと考ええる。他財閥との比較を通じて、はじめて住友財閥の性格確定もありうるが、その場合、それぞれの財閥についての基本的諸事実が提示されることが前提条件となるからである。とはいへ本書を単なる資料提示に終らせるつもりはない。私なりの分析枠組を設定し、一定の問題視角から住友財閥像の解明を志すことはもちろんである。その点は「序章」で述べることになるが、従来の財閥研究が、人的支配、株式所有による支配、資本蓄積構造の解明に重点をおいていたのに対し、本書では住友財閥の利益源泉、利益の実態を追求することによって、財閥行動を事業展開の中で具体的に把握すること、支配構造を資金的支配の面からもとらえ、そのために収支構造分析（ないし資金運用表分析）を適用すること、を加えている。したがつて本書は、住友財閥のすべてを網羅するものでは決してないが、未見の内部資料にもとづき、従来と異なつた視角から接近を試みたもので、いうなれば住友財閥の財務的側面を統括とからめて解明したということにならう。

近年展開してきた私の住友財閥史研究と本書との関連は次のごとくである。

- (一) 「一九二〇年以降の住友財閥に関する一考察」『専修経営学論集』二四号、昭和五三年三月。
- (二) 「両大戦間における住友財閥の販売部門」同右、一六号、同年七月。
- (三) 「住友財閥の有価証券所有」『社会科学年報』（専修大学社会科学研究所）一三号、同五四年三月。
- (四) 「住友家事業の経営組織」『専修経営学論集』二八号、同年八月。
- (五) 「戦時体制期の住友財閥」同右、三〇号、同五五年八月。
- (六) 「両大戦間における住友財閥の収支構造」『社会科学年報』一五号、同五六年三月。
- (七) 「住友財閥の資金調達と性格」『経営史学』一六卷二号、同年七月。
- (八) 「住友財閥の経営者層の考察」『専修経営学論集』三三号、同五七年三月。
- (九) 「財閥における経営統制の一考察」『専修経営研究年報』（専修大学経営研究所）六号、同年同月。

本書の第一部住友財閥の経営組織には、第九論文全部と第一、第五、第八論文の一部が組入れられ、再構成されている。第三部住友財閥の支配構造には、第三、第七論文の全部と第五論文の一部を使用して再構成している。第二部住友財閥の個別分析は、第一、第二、第五、第六論文の一部を使用したものの、大部分が新規に敘述したものである。本書全体としては、約半分が今回の刊行のために執筆されたものといえよう。

なお、本書では当初研究史整理を意図したが、本書の大部分が新しい事実の提示や分析であるため、通常の研究史整理の形をとりにくく割愛した。参考文献の列举も省略した。研究史や文献は、安岡重明編『財閥史研究』（日本経済新聞社、昭和五四年）や、前掲作道編『住友財閥』の附録に一通りみることで、屋上屋を架すこともあるまい。その代りに「おわりに」で若干のコメントをつけることにした。

最後に、本書の刊行にあたり次の点を記しておきたい。これまで金融史研究の立場で指導・教示をいただき、お世話になった方々には引続き感謝を申し上げねばならないが、経営史に参入してからいわれる経営史畑の多くの方々に接し御教示をえて、私の学問的関心が拡大されたことは喜ばしい。故柳川昇先生の経営学の演習に在籍しながら、い

つの間にか金融史に深入りした私が、近年、経営史の形で復帰したことを、歴史好きの先生は苦笑しておられるかもしれない。とにかく経営史学の先達中川敬一郎先生をはじめとする先学、友人諸氏にここで厚く御礼を申し上げたい。また、昔から何かとお世話になっている加藤俊彦、安藤良雄両先生、いくども報告し勉強の機会を得させていただいた比較財閥史研究会の諸氏にも感謝しなければならない。とりわけ本書が依拠した住友内部資料については、住友修史室の御好意によるもので、改めて厚く御礼を申し上げます。大冊になった本書の刊行を快諾して下さった東京大学出版会、著者の希望にもよく耳を傾け、多忙のうち面倒な仕事を根気よくきちんと進めて下さった、担当の大瀬令子氏の御努力に深謝申し上げます。

書斎の窓から毎日のように眺めている林が、青々と葉を茂らせた光景から、執筆中に葉を散らし幹と枝ばかりの光景に変じたが、この間に私のエネルギーも本書に吸収されつくしたようである。林が春にふたたび芽を吹くように、私も次の仕事のためにエネルギーを蓄積しなければならない。私事にわたり恐縮であるが、老父を入院させて約一年、そして逝き本書は間に合わなかった。公私共に多忙の中での本書の執筆を蔭で支えてくれた妻絹子の労も多ししたい。

昭和五八年三月

麻島 昭一

中川敬一郎著	比較經營史序説	三八〇〇円
加藤俊彦編	日本金融論の史的分析	九八〇〇円
柴垣和夫著	日本金融資本分析	三二〇〇円
志村嘉一編著	日本公社債市場史	五四〇〇円
一九二〇年代史研究会	一九二〇年代の日本資本主義	四五〇〇円
社会経済史学会編	一九三〇年代の日本経済	四四〇〇円
三菱社史刊行会編	三菱社史 全四〇巻	定価合計 三三二〇〇〇円
三菱総合研究所編	三菱社史総索引	七〇〇〇円

目次

はしがき

序章 本書の課題と分析方法

第一節 本書の分析対象と視角

一 分析対象

二 使用資料

三 問題意識

第二節 三部構成とその課題

一 第一部の課題

二 第二部の課題

三 第三部の課題

第一部 住友財閥の経営組織——統括を中心として

第一章 企業形態と傘下事業

第二節 住友合資会社設立と傘下事業の展開……………三

一 住友合資会社の成立……………三

二 合資会社形態の選択……………二五

三 住友傘下事業の展開・独立……………二七

第二節 株式会社住友本社への改組……………三〇

一 株式会社への改組事情……………三〇

二 住友傘下事業の編成替……………三六

第二章 住友家法・社則にみる統括組織

第一節 住友家法・社則……………四三

一 規定の変遷……………四三

二 「営業ノ要旨」の変遷……………四六

第二節 職 制……………四九

一 「住友家法」の職制……………四九

二 「社則」の職制	二
三 重役会と理事会	三
第三節 本社機構	三
一 住友総本店の統括組織	三
二 住友合資会社の統括組織	七
三 「社則」における統括組織	九
四 人材の検討	三
第三章 財閥本社の統括方法	
第一節 諸報告による統括	九
一 概 要	九
二 会計見積書と実際報告書	三
第二節 資金財産規程等	九
一 資金規程	九
二 財産規程その他	三
三 小 括	九

第二部 住友財閥の個別企業分析——財務を中心として

第一章 製造部門（その二）

第一節 伸銅所（住友伸銅鋼管）……………一〇三

一 概要——発展経過……………一〇三

二 事業と業績……………一〇七

三 事業収支・金融収支……………一二九

第二節 住友鑄鋼所（住友製鋼所）……………一三三

一 概要——発展経過……………一三三

二 事業と業績……………一三七

三 事業収支・金融収支……………一三九

第三節 住友金属工業……………一四六

一 住友金属工業の成立……………一四六

二 事業と業績……………一四一

三 事業収支・金融収支……………一五五

第四節 満洲住友鋼管（満洲住友金属工業）……………一五九

一	満洲住友鋼管の成立	一五九
二	事業と業績	一六三
三	事業収支・金融収支	一六八
第二章 製造部門（その二）		
第一節	電線製造所（住友電気工業）	一七一
一	概要——発展経過	一七二
二	事業と業績	一七七
三	事業収支・金融収支	一九三
第二節	肥料製造所（住友化学工業）	一九八
一	概要——発展経過	一九八
二	事業と業績	二〇三
三	事業収支・金融収支	二四四
第三節	住友アルミニウム製錬	二九九
一	住友アルミニウム製錬の成立	二九九
二	事業と業績	三三三
三	事業収支・金融収支	三六六

第四節 住友機械製作（住友機械工業）……………三八

一 住友機械製作の成立……………三八

二 事業と業績……………三九

三 事業収支・金融収支……………三八

補論一 日本電気（住友通信工業）……………三九

一 日本電気と住友……………三九

二 事業・業績・諸収支……………四〇

補論二 日米板硝子（日本板硝子）……………四四

一 日米板硝子と住友……………四四

二 事業・業績・諸収支……………四六

第三章 礦鉍業部門

第一節 別子鉍業所（住友別子鉍山）……………五一

一 概要——發展經過……………五一

二 事業と業績……………五一

三 事業収支・金融収支……………五一

第二節 若松炭業所・住友の炭礦三社……………六七

一 概要——發展經過	二六九
------------	-----

二 事業と業績	二七〇
---------	-----

三 事業収支・金融収支	二七五
-------------	-----

第三節 住友鉱業	二七六
----------	-----

一 住友鉱業の成立	二七八
-----------	-----

二 事業と業績	二八一
---------	-----

三 事業収支・金融収支	二八四
-------------	-----

第四章 非生産部門

第一節 住友倉庫	二八七
----------	-----

一 概要——發展經過	二八七
------------	-----

二 事業と業績	二九〇
---------	-----

三 事業収支・金融収支	二九〇
-------------	-----

第二節 大阪北港	二九三
----------	-----

一 大阪北港と住友	二九三
-----------	-----

二 事業と業績	二九七
---------	-----

三 事業収支・金融収支	三〇三
-------------	-----

第三節 土佐吉野川水力電気（四国中央電力）……………三六

一 土佐吉野川水力電気と住友……………三六

二 事業と業績……………三八

三 事業収支・金融収支……………三七

第四節 住友ビルディング……………三〇

一 住友ビルディングの成立……………三〇

二 事業と業績……………三三

三 事業収支・金融収支……………三六

第五章 販売部門

第一節 住友合資会社時代の販売部門……………三三

一 住友の販売部門戦略……………三三

二 各販売店の大口受注先……………三三

三 販売店の営業実績……………三九

第二節 住友本社時代の販売部門……………三七

一 大口受注先の変化……………三七

二	販売店の營業実績	三六二
三	住友の販売部門の性格	三六四
	第六章 金融部門	
	第二節 住友銀行	三六七
一	金融部門の分析	三六七
二	同行の特徴	三六八
三	事業と業績	三九一
	第二節 住友信託	四〇〇
一	新設事情	四〇〇
二	事業と業績	四〇一
	第三節 日之出生命保険（住友生命保険）	四一二
一	買収事情	四一二
二	事業と業績	四一五
	補論 扶桑海上火災保険（住友海上火災保険）	四三五
一	住友による買収	四三五
二	事業と業績	四三七